

## 社会科における「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり

### －社会的事象を「自分事」として捉え、「地域社会に関わろうとする態度」を育む単元の開発－ 総合支援部小中学校支援課小中第1班 長期研修員 山村 明由

#### 1 主題設定の理由

平成28年12月の中央教育審議会答申は、現行学習指導要領の社会科、地理歴史、公民における実施上の課題として、「主体的に社会に参画しようとする態度の育成が不十分である」「課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていない」と指摘し、「社会への関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実し、「国家及び社会の形成者としての必要な資質・能力を育んでいくこと」を示した（注1）。

平成29年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査においても、地域や社会をよくするために何をすべきかを考えさせるような指導を行っている」と回答した小中学校は、約70%だった（表1）。しかし、地域や社会をよくするために何をすべきかを考えるこ

表1 静岡県の各小中学校の地域に関する実態調査

番号 (小・中)	質問事項（学校質問紙）	小学校	中学校
83・82	地域や社会をよくするために何をすべきかを考えさせるような指導を行いましたか	70.7% (-4.9)	67.6% (-0.4)

表2 静岡県の児童生徒の地域に関する意識調査

番号 (小・中)	質問事項（児童生徒質問紙）	小学校	中学校
42・44	地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある	39.8% (-2.5)	34.8% (+1.4)

数値は肯定的回答の割合、( )の数値は全国平均との比較  
注) 国立教育政策所 平成29年度全国学力・学習状況調査結果資料  
【都道府県別】より筆者作成

とがある児童生徒は、小学校で39.8%、中学校で34.8%だった（表2）。これまでも社会科としては、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視し、改善に向けて指導をしてきたにも関わらず、この結果からも児童生徒の意識が高まっていない傾向があると分かった。そのため、よりよい社会の創り手となる資質・能力を確実に育むためには、小学校の段階から「社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて、学習したことを基に、社会への関わり方を選択・判断する」（注2）学習を通して、主体的に地域社会に関わろうとすることが一層重要だと考えた。

身近な社会的事象や地域社会に見られる切実な課題を取り上げることは、社会科の成立期から実践されている。宮本は地域社会に関わりながら学習する教育的意義について「児童・生徒も地域社会のなかで、社会の抱えている問題や課題を生活体験・生活実感として内在化させながら生活しているので、地域社会の問題や課題を自分の問題や課題として、その解決に立ち向かうことができる」と述べている（注3）。しかし、児童が様々な生活体験をしていたとしても、社会の抱えている問題や課題を生活実感として内在化させているとは限らない。そのため、身近な社会的事象や地域社会に見られる切実な課題を単に取り上げただけでは興味・関心を引き出すことに留まってしまうおそれがある。こうした児童が課題解決に向かうためには、身近な社会的事象や地域社会に見られる切実な課題を「自分事」として捉えた学びの過程を辿ることが肝要になる。「自分事」として捉えることは、切実に問い続ける児童の学びの原動力となり、質の高い学びにつながると考える。

以上の理由から、社会科における「主体的・対話的で深い学び」の実現する授業づくり

として、社会的事象を「自分事」として捉え、「地域社会に関わろうとする態度」を育む単元を開発し、手立ての有効性を分析・検証することとした。

## 2 研究の目的

身近な社会的事象及び地域社会に見られる切実な課題を「自分事」として捉える学習過程を工夫することにより、「主体的・対話的で深い学び」の実現を通して「地域社会に関わろうとする態度」を育む単元を開発する。

## 3 研究の方法

- (1) これまでの『小学校学習指導要領』及び『解説』、文献等から、本研究で育む児童の態度を明確にし、社会的事象を「自分事」として捉え、「地域社会に関わろうとする態度」を育む学習過程（モデル）を構想する。
- (2) 社会科の学習に対する児童の意識や、社会科の指導に対するA市の小学校教員の意識を質問紙調査から分析し、その実態を明らかにする。
- (3) 第4学年の児童を対象に「健康なくらしとまちづくり」の授業実践Ⅰ及びⅡを行う。
- (4) 開発した単元が「主体的・対話的で深い学び」の実現を通して、「地域社会に関わろうとする態度」を育むことに効果的だったかを、授業実践後の社会科の学習に対する児童の意識に関する質問紙調査結果や児童の学びの姿から分析・検証する。

## 4 研究の内容

### (1) 本研究で育む資質及び学習過程の工夫

#### ア 本研究で育む「地域社会に関わろうとする態度」

本研究は、第4学年の学習内容を対象とする。『小学校学習指導要領解説 社会編（平成29年6月公示）』（以下『解説社会編（H29）』）では、第4学年の「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養う」を「学習成果を基に生活の在り方やこれからの地域社会の発展について考えていこうとする態度を養うようにすること」と示している（注4）。

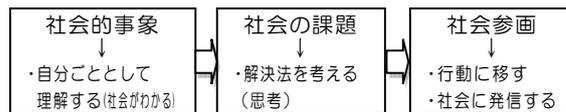
澤井は、現行小学校学習指導要領で示されている「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を養うことについて、「現在から将来にわたって、自分がどうかかわっていけばよいのかを考え続ける、関心を持ち続ける、問い続ける、そのような態度や能力を育てていくことが本当の意義だ」と述べている（注5）。

以上を踏まえると、第4学年の児童においても自分たちの生活を内省し、地域社会への関わり方を問い続け、よりよい地域社会の形成のために能動的に行動しようとする態度を育むことが大切だと考える。

そこで、本研究で育む資質の中核として位置付ける「地域社会に関わろうとする態度」を「学んだことを基に、地域社会の一員としての自覚をもち、自分たちができることを考え、協力して取り組もうとする能動的な態度」と捉える。

## イ 社会的事象を「自分事」として捉えた児童の姿

北は、「自分ごと」として捉えることを「社会的事象と自分の生活とのかかわりを意識し、理解するようになること」と定義している（注6）。さらに、「社会参画のステップ」を、社会的事象を「自分ごと」として理解することによって、児童は社会の課題に気づき、解決しようとする社会参画への意識が芽生えると示している（図1）。



出典) 北俊夫著『なぜ社会科を学ばせるか』文溪堂, 2012, 46 ページ

図1 社会参画のステップ

そこで、本研究では、社会的事象を「自分事」として捉えた姿を「社会的事象及び地域社会に見られる切実な課題と自分たちを含めた地域の人々の生活を関連付けて理解し、よりよい地域社会の形成への当事者意識をもっている状態」と位置付ける。社会的事象を「自分事」として捉えることは、切実に問い続ける児童の学びの原動力となる。そして、「自分事」として捉えた理解や意識が深まることによって、質の高い学びにつながり、児童の態度形成にも効果的に結び付くと考える。さらに、実生活で行動に移したり、社会に発信したりすることなど、現在から将来に渡って、主体的な社会参画へつながることが期待できる。

## ウ 社会的事象を「自分事」として捉え、地域社会に関わろうとする態度を育む学習過程

『解説社会編 (H29)』では、深い学びを実現する学習過程の工夫として、「社会的事象の特色や意味など社会の中で使うことのできる応用性や汎用性のある概念などに関する知識を獲得するよう、問題解決的な学習を展開すること」「学んだことを生活や社会に向けて活用する場面では、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断することなどの活動を重視する」と示している（注7）。澤井は「小学校における問題解決は、この両者をどのように組み合わせしていくかを考えていくことが大切」だと述べている（注8）。

そこで、本研究では、社会的事象を「自分事」として捉え、「地域社会に関わろうとする態度」を育むために2段階の問題解決的な学習過程を構想する（図2）。

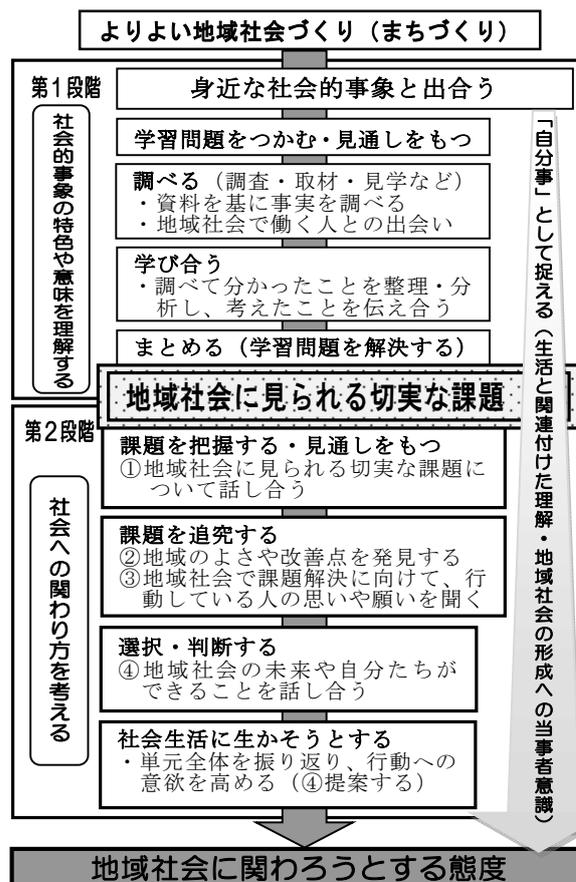


図2 社会的事象を「自分事」として捉え、「地域社会に関わろうとする態度」を育む学習過程(モデル)

第1段階の「社会的事象の特色や意味を理解する問題解決的な学習」では、身近な社会的事象と出会い、興味・関心を高め、自分たちの生活との関わりに気付きながら社会認識の形成を図る。この第1段階の学びを土台とし、社会に見られる切実な課題をつかむ機会を意図的に組み込むことにより、第2段階の「社会への関わり方を考える問題解決的な学習」へと発展させ、学びを広げていく。第2段階では、地域社会に見られる切実な課題を「自分事」として捉え、よりよい地域社会の形成のために自分たちができることを考え、選択・判断する学習を取り入れる。具体的には、佐藤が提案している4つの「地域の未来を考える視点」(表3)を参考に、社会への関わり方を考える学習活動として「①社会に見られる切実な課題について話し合う」「②地域のよさや改善点を発見する」「③実社会で課題解決に向けて、行動している人の思いや願いを聞く」「④自分たちができることや地域社会の未来を話し合い、提案する」を学習過程に位置付ける。

**表3 地域の未来を考える視点**

- ・地域の将来像を提案する
- ・地域の問題を話し合う
- ・地域の願いを生かす
- ・地域のよさを再発見する

出典) 佐藤浩樹著『地域の未来を考える提案する社会科学習』学芸図書株式会社, 2006, 11 ページ

このように、2段階の問題解決的な学習過程を工夫し、身近な社会的事象及び地域社会に見られる切実な課題を「自分事」として捉えながら、自分たちを含めた地域の人々の生活を関連付ける見方・考え方を働かせることにより「主体的・対話的で深い学び」の実現を通して、「地域社会に関わろうとする態度」の育成を図ろうと考えた。

## (2) 質問紙調査による実態把握

### ア 社会科の学習に対する児童の意識

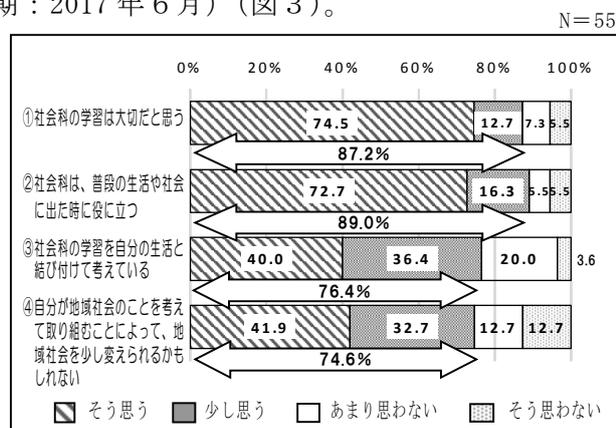
所属校の第4学年児童 56人(2組 27人、4組 29人)に対して、社会科の学習に対する意識調査を実施した(調査時期:2017年6月)(図3)。

質問①「社会科の学習は大切だと思う」での肯定的回答は87.2%、質問②「社会科は、普段の生活や社会に出た時に役に立つ」での肯定的回答は89.0%だった。

一方、質問③「社会科の学習を自分の生活と結び付けて考えている」での肯定的回答は76.4%、質問④「自分が地域社会のことを考えて取り組むことによって、地域社会を少し変えられるかもしれない」では74.6%に留まった。

また、質問①及び②に対し、質問③及び④の肯定的回答をそれぞれ比較すると10ポイント以上の開きがあった。直接確率計算、両側検定の結果からも、有意傾向及び有意傾向に近い偶然確立の値が算出され、一定程度の差が認められた(.08<p<.15)。

以上の結果から、多くの児童が社会科の学習の大切さや学ぶ意義は理解しているものの、社会科の学習を日常生活と結び付けようとする意識はやや低い傾向があった。同様に、地域社会に対する主体的な関与や参加を通して、地域社会に貢献できるとい



**図3 児童質問紙調査結果**

う意識も十分に醸成されているとはいえない。そのため、地域社会への関わりを深め、社会的事象を「自分事」として捉える授業の積み重ねが必要だと考えた。

## イ 社会科の指導に対する教員の意識

A市内の小学校教員で社会科を担当している73人に対して、社会科の指導に対する意識調査を実施した（調査時期：2017年7月）（図4）。

質問①「教科書の例示に沿った問題解決的な学習に取り組んでいる」での肯定的回答は90.4%、質問②「地域社会の課題を取り上げている」での肯定的回答は65.8%だった。

さらに、質問③『「地域社会に関わろうとする態度」を養うことを意識している』での肯定的回答は87.7%まで達したにも関わらず、

質問④『「地域社会に関わろうとする態度」を養うことが実現できている』での肯定的回答は39.7%に留まったことから、過半数を超える教員が「地域社会に関わろうとする態度を養うこと」を不十分だと感じていることが明らかとなった。

以上の結果を考察すると、質問①及び③の結果から、小学校社会科を指導する多くの教員が、問題解決的な授業展開に取り組んでおり、児童の態度形成への意識をもっていることが分かった。しかし、質問②及び④の結果を比較すると、26.1ポイントの開きがあったことから、やはり、児童の態度を育むためには、地域社会に見られる切実な課題を「自分事」として捉えた学びの展開が必要だといえる。

## (3) 社会的事象を「自分事」として捉え、地域社会に関わろうとする態度を育む単元の開発

### ア 実践Ⅰ 第4学年「ごみはどなる？ごみをどうする？」単元構想

授業実践の期間：2017年6月26日から7月20日まで（全13時間）

授業実践の学級：A市立小学校第4学年2組（27人）及び4組（29人）

A市の最終処分場は、このままのペースで焼却灰の埋め立てを続けると、7年後に満杯になってしまうと予測されている。A市は最終処分場を延命するための施策として、平成23年度から焼却灰のリサイクルを外部委託し、焼却灰の70%をセメント原料として再利用している。しかし、今後の根本的な対策は検討事項であり、喫緊の課題となっている。現段階で、A市は市民の協力によってごみを減量し、最終処分場をさらに長く利用していきたいという願いをもっている。

そこで、第1段階ではごみを処理する仕組みに着目し、衛生的に処理する事業を理解する学習を展開する。この第1段階の学習で、自分たちの生活との関わりに気づき、ごみを処理する仕組みによって、生活環境の維持と向上が図られていることを理解したところで、最終処分場の残余容量が逼迫しているという喫緊の課題を取り上げる。第2段階では最終処分場の延命に向け、ごみの減量の対策や事業に携わる生活環境課

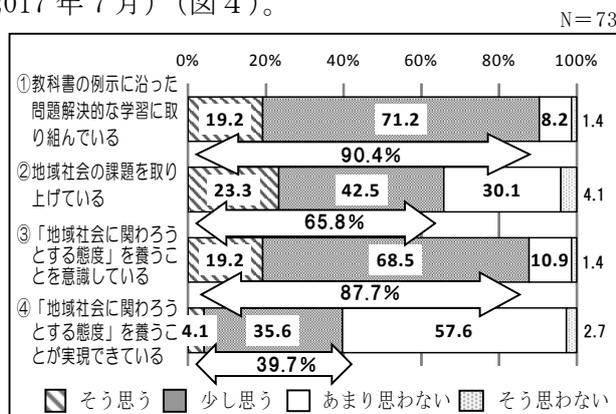


図4 教員質問紙調査結果

職員や雑紙のリサイクル活動の啓発に自主的に取り組む区長の思いや願いに着目し、自分たちの生活を含めた地域の人々の生活環境を関連付けながら考え、選択・判断する学びを展開する。ごみを処理する事業やごみの減量に対する「自分事」としての捉える意識を更に深めながら、「地域社会に関わろうとする態度」を育むことができるよう単元を構想した（図5）。

段階	時	学習課題	学習問題	見方・考え方（追究の視点や方法）
〔1〕 ごみを衛生的に処理する事業を理解する	1	(家庭での1週間のごみ調べ・ごみ出しの手伝い)	みんなの家庭では、どのようなごみがどれくらい出ているのだろうか。	日常生活で出される廃棄物の量と自分たちの生活を関連付けて考えることで、様々なごみを毎日大量に出していることを認識し、興味・関心を高める。
	2	みんなの家庭では、ごみをどのように出しているのだろうか。	私たちが出したごみはどのように集められ、処理されているのだろうか。	集積場所に出されたごみの写真と回収後の集積場所の写真と比較することで、ごみを処理する仕組みを視点にした学習問題をつくり、解決に向けて予想する。
	3	ごみ収集車はどこに行って、その後、ごみをどのように処理しているのか予想しよう。(学習後:収集の様子を見学)		教科書の事例を基に、ごみの分別回収、処理方法、リサイクルなど、ごみを処理する仕組みや働く人の役割に着目して考え、学習の見通しをもつ
	4	収集に携わる人はどんな思いをもって働いているのだろうか。		収集に携わる人の工夫や努力や願いに着目して、仕事内容や収集の仕組みに関する話を聞き、共感的に捉える。
	5	清掃センターでは、どのようにごみを処理しているのだろうか。		清掃センターでのごみを処理する仕組みや対策に着目して見学することで、様々なごみを衛生的に処理する事業を捉える。
	6		最終処分場の残余容量の現状を知る	
	7		わたしたちのくらしから出たごみは、どのように集められ、処理されているのだろうか。	ごみを処理する仕組みや人々の協力関係と、生活環境への影響に着目し、これまでの学習を総合して考えることで、ごみを処理する事業が衛生的に進められ、健康な生活を支えていることを理解する。
〔2〕 最終処分場の延命に「ごみ減量プラン」を考え提案する	8		地域社会に見られる切実な課題……	最終処分場が7年後にいっぱいになってしまう
			ごみをもっと減らすためには、どうしたらいいのだろうか。	最終処分場の課題解決への対策の必要性に着目して、生活環境課職員と話し合い、自分たちの生活と関連付けて考えることで、課題意識を醸成し、解決への見通しをもつ。
	9	A市のごみの量はどのように変わってきたのだろうか。	学習活動①	一人1日当たりのごみの排出量の変化に着目し、A市と、先進的にごみの減量に取り組むB市を比較することで、A市の改善点を捉え、よりよい地域社会のイメージを膨らめる。
	10	ごみを減らすためには、B市のどの取組が効果的だろうか。	学習活動②	B市の取組を参考にして、ごみを減らす工夫に着目し、その効果を比較しながら話し合うことで、ごみを減らすための視点を導く。
	11	区長はどんな思いをもって雑紙のリサイクル活動に取り組んでいるのだろうか。	学習活動③	雑紙のリサイクル活動の啓発に自主的に取り組む区長の思いや願いに着目し、自分たちを含めた地域の人々の生活と関連付けながら話を聞き、ごみを減らす活動に取り組もうとする意欲を高める。
	12	「ごみ減量プラン」を考え、もっと効果的にするにはどうしたらいいのだろうか。	学習活動④（話し合う）	これまでの学習を総合し、自分たちの生活と関連付けた「ごみ減量プラン」を考え話し合うことで、解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する。
13	ごみをもっと減らすためには、どうしたらいいのだろうか。	学習活動④（提案する）	生活環境課職員の思いやA市の対策に着目して、話を聞き、これからの自分の在り方をよりよいA市の姿と関連付けて考えることで、「地域社会に関わろうとする態度」を育む。	

図5 授業実践Ⅰ「ごみはどうなる？ごみをどうする？」単元構想

## イ 実践Ⅱ 第4学年「水はどこから？水をどうする？」単元構想

授業実践の期間：2017年9月15日から10月3日まで（全13時間）

授業実践の学級：A市立小学校第4学年2組（27人）及び4組（29人）

A市は富士山周辺に位置し、富士山の地下水を源とする湧水群など水資源が豊富であり、現在は水不足の心配はない。そのため、豊かな水がある生活は児童にとって日常であり、水資源を大切にしようとしたり、有効活用しようとしたりすることへの関心は薄いと思われる。しかし、よりよい地域社会を形成するためには、地域のよさを

知り、保護や継承を考え、社会への関わり方を選択・判断する学習が必要だと考える。

そこで、第1段階では飲料水の供給の仕組みや経路、水道事業の役割に着目して、安全で安定的に供給する事業を理解する学習を展開するとともに、富士山とのつながりや地下水の価値に気付くようにする。この第1段階の学習で、自分たちの生活との関わりに気付き、健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解したところで、地域のよさである富士山の豊富な地下水を教材として取り上げる。湧水量や水道水の使用量の変化に着目し、富士山の地下水を未来でも使い続けたいという児童の思いを膨らめ、切実な課題意識へと発展させる。第2段階では、地下水を利用する工場と自分たちの生活を含めた地域の人々の生活を関連付けて考え、選択・判断する学びを展開する。水道事業や富士山の地下水を「自分事」として捉える意識を更に深めながら、「地域社会に関わろうとする態度」を育むことができるよう単元を構想した(図6)。

段階	時	学習課題	学習問題	見方・考え方(追究の視点や方法)
[1] 飲料水を安全で安定的に供給する事業を理解する	1	私たちはどんなことに、どのくらいの水道水を使っているのだろうか。 (家庭学習：水道メーター調べ)		<u>水道水の使用と自分たちの生活を関連付けて考える</u> ことで、様々な場面で水道水を使っていることを捉え、水道水の使用量への興味・関心をもつ。
	2	私たちは生活の中で、どのくらいの水道水を使っているのだろうか。 <b>たくさんの水道水は、どこからどのように送られてくるのだろうか。</b>		<u>家庭、学校、A市の空間的な広がりに着目して、自分たちの生活と関連付けて考え、水道水の使用量を調べる</u> ことで、大量の水道水を使っていると捉え、供給の仕組みや経路を視点とした学習問題をつくり、解決に向けて予想する。
	3	水道水は、どこからどのように送られてくるのだろうか。		<u>供給の仕組みや経路の位置や空間的な広がりに着目して、地域資料やA市の水道施設マップを基に、供給の仕組みや経路を調べる。</u>
	4	市役所で働く水道課の人は、どんな仕事をしているのだろうか。		<u>水道事業の役割や水道課の努力に着目して、仕事内容についての話を聞き、安全で安定的に供給できるように努力していることを共感的に捉える。</u>
	5	富士山からたくさんのきれいな地下水が流れてくるのはどうしてだろうか。 <b>富士山の地下水の貴重さ・豊富さを知る</b>		<u>地下水が流れる仕組みや経路に着目して、花と緑と水の課職員から話を聞くことで、地下水と富士山の自然との関わりを捉える。</u>
	6	水道がある「よさ」は何だろうか。 <b>富士山の湧水量が変化した事実を知る</b>		<u>時期や地域による違いに着目して、自分たちの地域と比較したり、これまでの学習を総合したりして考える</u> ことで、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解する。
[2] 富士山の地下水を使い続けていく方法を考える	<b>地域社会に見られる切実な課題・・・富士山の地下水を未来でも使い続けたい</b>			
	7	これから富士山の地下水を水道水として使い続けていくためには、どうしたらいいのだろうか。 学習活動①		<u>湧水量の変化や原因に着目して、自分たちの生活と関連付けて話し合う</u> ことで、課題意識を醸成し、学習問題をつくる。
	8	A市の水道水の使用量はどのように変わってきたのだろうか。 学習活動②		<u>水道水の使用量の変化に着目して、A市と富士山周辺の市町の水道水の使用量を比較する</u> ことで、A市のよさを捉える。
	9 10 11	製紙工場では紙を作るために、地下水をどのように使っているのだろうか。 学習活動③		<u>製紙工場での地下水の利用に対する工夫や努力に着目して、話を聞くことで、自分たちも水道水(地下水)を大切に使い続けようとする意欲を高める。</u>
	12 13	これから富士山の地下水を水道水として使い続けていくためには、どうしたらいいのだろうか。 学習活動④(話し合う)		<u>これまでの学習を総合し、自分たちの生活を含めた地域の人々の生活を関連付けて考え、自分たちができる取組を考え話し合う</u> ことで、社会への関わり方を選択・判断し、「地域社会に関わろうとする態度」を育む。

図6 授業実践Ⅱ「水はどこから？水をどうする？」単元構想

#### (4) 授業実践の分析と検証

##### ア 質問紙調査から見る社会科の学習に対する児童の意識の変容

実践前と実践後で、社会科の学習に対する児童の意識がどのように変容したのかをまとめ、Wilcoxon符号付順位検定(以下「検定」)により比較した(図7)。

質問③では実践前と比べ、肯定的回答は7.5ポイント増え、83.9%に結果となった。検定による比較では、有意ではないがやや多い傾向が見られた (W=1788, p=.11)。

質問④では実践前と比べ、肯定的回答は7.5ポイント増加し、82.1%になった。また、「そう思う」と回答した割合は20.6ポイント増加した。検定による比較では、分布に有意な差が認められたことから、実践後の方が、「自分が地域社会のことを考えて取り組むことによって地域社会が少し変えられるかもしれないと思う」という意識が高まったことが明らかとなった (W=1846, p<.05)。

以上の結果から、本研究における学習過程(図2)により、児童は社会科の学習内容と自分の生活を、より関連させて考えるようになり、地域社会に貢献できるという思いが高まったといえる。

さらに、質問⑤での肯定的回答は7.4ポイント増加し、89.2%となった。また、「そう思う」と回答した児童の割合は27.7ポイント増加し、分布において有意な差が認められた (W=1947, p<.01)。

この結果から、本研究における学習過程(図2)は効果的に働き、児童は学びの実感や課題解決のおもしろさを得ることにつながったと考えられる。そのため、児童は社会科の学習を好意的に捉えるようになったと分析する。

## イ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に関する分析と検証

実践Iにおける児童の具体的な学びの過程に着目し、同一グループのC1、C2、C3の対話記録と振り返りの記述から分析と検証を行った。

表4の対話記録は最終処分場の切実な課題を知ったC1たちが、解決方法を検討している場面である。C1たちの関心は高まっているものの、自分たちを含めた地域住民の生活に及ぼす影響に気付いていないため、政策や事業による解決に考えが偏っている。そこで、地域住民の生活との関わりや影響に気づき、課題解決への見通しをもつために、生活環境課職員を交えて、話し合う時間を設けた。最終処分場の建設や用地の確保のための地域住民の理解、事業に伴う税金の負担など、解決の難しさに気付くことにより、ごみを減量する取組に対して、課題意識が生まれると考えた。

表5の対話記録は、第9時開始直後に再度グループで解決方法を吟味している場面である。C1たちは、生活環境課職員との対話を通して、自分たちが考えた政策や事

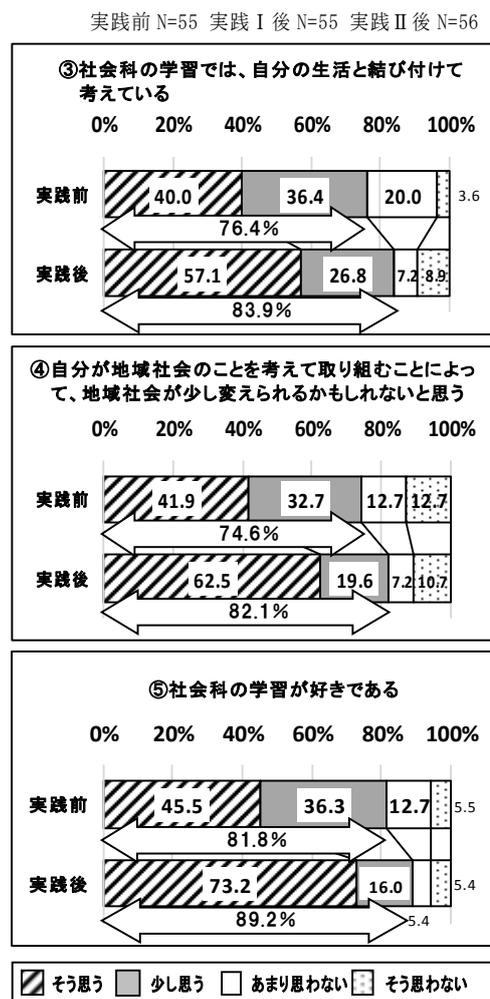


図7 児童質問紙結果の比較

業による解決方法の実現が困難だと理解し、ごみを減量することが最善の解決策だと捉えることができた。C1はごみを減量する必要性を繰り返し発言し、C2はC1の発言を共感して受け止めている。さらに、C3においては、日常生活への影響を具体的に考えている。

このように、実社会で課題解決に取り組む関係者と話し合う対話的な活動を設定したことで、C1たちの発言は自分たちを含めた地域の人々の生活との関わりや影響を考えるものへと変容し、最終処分場の切実な課題を「自分事」として捉える意識の深まりにつながったといえる。

また、3人の発言には自分たちが協力できそうなごみを減量する取組が表れていることから、生活環境課職員や友達との対話を通して、児童の学びが課題解決への見通しをもった主体的なものになった表れと捉えることができる。

表6は、第8時以降のC1たちの振り返りの記述である。学びの過程を進めながら、自分たちの生活を含めた地域の人々の生活に関連付けて理解し、社会への関わり方を選択・判断する姿が顕著に表れている。

C1は第9時において、A市全体のごみが減量した実態から、市民の意識の高まりを捉えた。第10時では、B市のごみを減量する取組の効果の是非を、友達と話し合ったところ、個々の考え方や捉え方は異なることに気付いた。そして、第11時では雑紙のリサイクル活動の啓発に自主的に取り組む区長との対話により、区長の思いや願いを共感的に捉え、真剣に取り組もうとする意欲の高まりが窺える。

このような学びの過程を経て、第12時では、これまでの学習を総合し、ごみを減量する目的や取組に対する意識が大切だと捉え直している。

そして、単元の終末の第13時では、ごみ処理に携わる人たちの努力を挙げていることから、第1段階の学びがC1の学びの質の高まりに影響していることが分かった。さらに、「ぼくは少し近付けたかな」という表現は、自らの理想像、もしくは在りたい姿を思い描きながら追究し、よりよい社会の創り手としての一人に近付いた表れだと捉えることができる。

C2は第8時の段階で、すでに、自分たちだけで解決できる課題ではないと気づき、

表4 対話記録（第8時）

GT(ゲストティチャー):生活環境課職員

C2:(埋め立てする焼却灰の)割合を少なくしたら。  
 C1:えっ!100%(焼却灰をリサイクルすることは無理でしょ。  
 C2:100%にしたら、(焼却灰がリサイクル施設に)多くなってしまふ。  
 C1:新しい処分場を作れば、ずっと使えるけど。  
 C2:そうそう。新しい処分場を作れば、(焼却灰の)リサイクルは100%しなくても大丈夫だよな。  
 C1:でも、ちょっと割合を増やすとか。今は70%だから、80%、90%ぐらいにすれば。でも、今のままでも、もう70%リサイクルされているから…(無理かな)でも、リサイクル施設を作ると、お金が掛かる。作れば最終処分場を作る必要はないけど…。  
 C3:うーん。この考えは無理だね。  
 GT:どう意見は出た?難しい?  
 C1:砂浜に灰をまくのはまず無理だし…。  
 C3:海がきたなくなってしまう。  
 GT:うん。そうだよね。  
 C1:リサイクル施設を作れば、最終処分場は作る必要はないけれど、費用がかかる。70%を他の業者に頼んでいるから、残りの30%をリサイクルできる施設を作ったとしてもお金は掛かるし、まず、そういうのは無理だと思う…。

表5 対話記録（第9時）

C1:30%の灰を埋めるのをリサイクルするのは無理だけど、その分(のごみ)減らすことはできる。70%を80%にしなくても、その30%埋める分を減らせば、最終処分場は長く使えると思う。一人一人の努力で、例えば、スーパーの袋をもらわないとか、ペットボトルをリサイクルに出すとか、古紙回収に新聞を出すとか、そういう努力で、ごみは減らせるので協力したいと思った。  
 C3:私も、灰のリサイクルを100%にすることは難しいと分かりました。(もし、埋め立てられなくなって)ごみを自分の家ですぐにかしてと言われたら、みんなも困るので、スーパーの袋とか使わないようにしたい。  
 C1:C3が言ったように、100%リサイクルは無理なことだし、リサイクルできないものもある。だから、ごみを減らせばいいんだよ。長く使うためには、マイバッグを持つとか、リサイクルに出すとか、何かしら工夫をしていけばいいと思う。  
 C2:そう!ごみを減らせばいいんだよ。  
 C3:そうなんだけど、一人一人がやればいはいけれど、呼び掛けないとやってくれないよ。学校でポスターを作って見てもらうとか。

表6 第8時から第13時までのC1・C2・C3の振り返りの記述

	C1	C2	C3
第8時	うめる灰の30%を減らし、最終処分場を長く使えるように、一人一人の努力で減らしていきたい。そうすれば、最終処分場を長く使えることが分かった。自分たちでも協力してリサイクルをしていきたいなど思った。	最終処分場を長く使うようにするために、ごみを減らせばいいと分かりました。自分たちもエコバッグなど使ったりリサイクルをしたら、みんなに呼び掛けて広めていきたいです。	わたしは灰のリサイクル100%は難しいと分かりました。ごみを出せない私たちは困るので、スーパーでビニール袋をもらわないようにして、少しでもごみを減らしたいです。
第9時	A市のごみの量は波のように上がったり下がったりして、B市よりも(ごみの量は)多いけれど最終的に減ってきていることが分かった。その理由はリサイクルなどを意識して生活している人が増えてきているためだと思った。	B市と比べたら、A市はとでもごみが多かったので、B市の取組をまねすればいいと思いました。どうして、B市はそんなに少ないのか聞いてみたいです。	B市のごみの量は少なくともいいと思いました。B市のごみの減らし方をまねすればいいと思いました。わたしは一人一人がエコバッグを使えばごみは少しでも減らせる!と思いました。
第10時	効果的と考える取組と効果的じゃないと考える取組が一人一人違った。B市の取組にも良いところと悪いところがあって、それをどう考えるかで、友達の見解が違った。	生ごみ処理機は最初に聞いたときは生ごみが分解されていいと思ったけど、班で話し合っていてうちに、いちいち埋める手間が掛かるので、△になりました。	私は①チェックシート②生ごみ処理機③マイバッグがいい方法だと思いました。私は友達の「繰り返し使える。」という意見を聞いて、誰でもできるから「やろう!」と思いました。
第11時	区長の話聞いて、もっと真剣にリサイクルに取り組もうと思った。	たくさん紙がリサイクルできると分かりました。みんながやれば7年後には、灰が溜まることはないと思いました。	私は、区長さんの話を聞いて、これから雑紙のリサイクルに気を付けてごみを出そうと思います。
第12時	いくら工夫や効果的な取組をやっても、それを意識してやるのが大切だと感じた。工夫を覚えて実行したいと思いました。	小まめにごみを減らすように意識していくことが大切だと思いました。市民のみんなに伝えていくのがいいと思うけど、伝わらなくても自分たちで減らしていきたいです。	自分の家でできることを考えると、生ごみ処理機は場所を取るのでもめようと思いました。でも、段ボールコンポストの生ごみ処理機があると知って、やってみようと思います。
第13時	いろんな人がごみの処理に関わり、ごみを減らすと努力しているのを知って、ごみを減らすために自分たちにもできることを考えて協力して、努力していきたいなと思いました。ごみには深刻な問題が数多くあることが分かって、ぼくは少し近付けたかなと思いました。	ごみの勉強をして、今はたくさんのがリサイクルできて、身近なものになると分かりました。私たちがたくさんのごみに協力できると分かったので、ごみを減らすために自分たちにもできることを考えて生活していきたいと思いました。	ごみは臭い、汚い、結局燃やされるものだから、いらぬものだと思ってたけど、生活環境課の方の話を聞いて、リサイクルすれば繰り返し使えて、ごみは減らせると気付きました。私のごみへの感じ方は、臭い、邪魔とかではなく「大切にしよう!」になりました。

ごみを減量する取組を地域住民へ広めることを考えている。第11時でも、地域住民の協力が課題解決につながると捉えている。さらに、第12時になると、C2は自分たちの行動について言及し、第13時の振り返りの記述では、自分たちの生活と関連付けて考え、協力しよう判断している。このC2の思考の変容は、第11時及び12時での区長やC1たちとの対話によって、ごみの減量を「自分事」として捉える意識が深まったからだと考えられる。

このような学びの過程を通して表れたC1、C2の姿は、これまでの学習を総合し、自分たちの生活を含めた地域の人々の生活を関連付けて考え、社会への関わり方を判断した深い学びとなっているといえる。

C3の第13時の振り返りの記述を見ると、リサイクルの重要性に気付き、ごみに対する認識が大きく変容していることが分かる。そこで、学びの過程で理解したことが、行動につながっているかを確かめるために、聞き取りによる追跡調査を実施した。すると、マイバッグの使用や生ごみの水切りは実践I後から継続して取り組み、11月からは新たに段ボールコンポストによる生ごみ処理や、ティッシュを使わないようにする雑巾がけ運動を始めていた。つまり、振り返りに記述したごみを減量する方法をすべて実行し、日常生活の中で習慣になっていることが分かった。

したがって、C3は第8時以降、家庭の状況に合わせ、自分にできることを繰り返し考え、社会への関わり方を選択・判断していたと考えられる。このような学びの姿が表れたのは、本研究における学習過程(図2)が効果的に働いた結果だといえる。

表7は実践IIにおけるC4の学びの過程である。C4も自分たちの生活と地域の人々の生活を関連付けて理解し、社会への関わり方を判断した姿が顕著に表れている。

C4は1960年代から70年代に起きた湧水量の減少の原因が工場の取水にあると考え、現在の製紙工場の実態や取組に対する関心が高まり、問題意識が生まれている。そして、第9時からの製紙工場見学では、地下水の利用に対する働く人の思いや、環境に配慮した取組を共感的に理解したことにより、地下水の利用に対して「自分事」として捉える意識が芽生えている。その結果、C4の思考は、自分たちの生活を内省するものへと転換し、解決の方向性が明確になったと考えられる。

さらに、第13時では、友達との対話を通して、地下水の利用に対して「自分事」として捉える意識は一層深まっている。C4の発言は、湧水量の変化や地下水の貴重さなど、地下水の利用を自分たちの生活を関連付けて理解し、地域のよさである富士山の地下水を保護し、継承していこうとする思いへと発展している（表8）。

また、第12時及び13時の振り返りでは、C5の富士山の環境に関する発言に共感し、富士山の環境を守る視点が加わっている。

以上のことから、実社会で地下水を利用して働く人たちが友達との対話により、C4の学びは、解決への見通しをもった主体的なものへと変容し、これまでの学びを総合し、自分たちの生活を含めた地域の人々の生活を関連付けて考え、社会への関わり方を判断した深い学びになっているといえる。

また、他の児童の第13時の振り返りの記述には、「地下水をあまり使わないように、どうしたらいいかもっと考えたい」など、新たな問いを見出す様子が表れた。今後の実践において、社会科の学習を通して生まれた実生活や実社会に関わる問いを、教科横断的な視点で、自己の生き方を考える総合的な学習の時間へと広げることができれば、「地域社会に関わろうとする態度」を効果的に育むことにつながると思われる。

## ウ 「地域社会に関わろうとする態度」を育むことに係る児童の学びの質の高まり

### (7) 学習過程全体から捉えた「地域社会に関わろうとする態度」の表れ

表9は単元の終末での「地域社会に関わろうとする態度」が顕著に表れた振り返りの記述である。実践Ⅰでは「ごみを減らすこと」、実践Ⅱでは「水を大切にすること」に対して、自分たちができることに、協力して取り組もうとする意志が表れている。

このような「地域社会に関わろうとする態度」が表れた振り返りの記述の人数と割

表7 児童C4の振り返りの記述

第7時	ここまで減っているとは思ってなくて、たった20年で20万トンも少なくなっていてびっくりした。工場はいい環境に作りたいのは分かるけど、ぼくたちに影響を与えるのはどうにかならないのか、今度の見学で早く知りたい。
第8時	A市は意外と水を使っていないことが分かった。みんなが意識すればもっと平均(使用量)が少なくなると思った。地下水を使う工場は意外と新しいものもあって、それはA市が呼んでいると知ってびっくりしました。
第9時 ～ 11時	製紙工場では1日に5500トンの地下水を使っていて、そんなにもあると知ってA市は恵まれているなど改めて思いました。地下水が少なくなっているのは工場のせいだと思っていたけど、できるだけ少なく大切に使用していると聞いて、ならぼくたちも節約して無駄遣いをしないようにしようと思いました。
第12時 ・ 13時	今まで何も考えないで水を使っていたけど、富士山の地下水を飲める地域は少ないし、10年から20年掛かってできているからもっとありがたみをもって使おうと思いました。富士山の環境も大切にしないといけないので、もし富士山に行ったらごみを捨てないようにしたいです。

表8 対話記録(第13時)

C6:無駄遣いはだめだね。工場側も考えていたし…。
C4:うん。1日に使う量を決めて、きれいにしてから流していた。
C5:工場もできるだけ使わないようにしていたから、自分たちも無駄に使わないようにすれば、使えるはず。
C4:今は(湧水量が)安定しているからいいけど、すぐ減ったら使えない。A市も富士山の周りのまちも…自分たちだけじゃなくて先のこと考えないといけない。地下水の使えるところも少ないから使えることをありがたく思って、考えて水を大切にすればこれから先もずっと使えようと思う。ぼくたちが無駄に使って得になることはない。自分たちも困るし、先の人も困るし、今ぼくたちが大切に使わないといけない。
C5・C6:そうだね。
C5:これから一番大切なのは無駄遣いしないで、考えて使うことだね。
C6:富士山の地下水がなくなったら昔みたいに戻ってしまう。
C5:環境が悪くなれば富士山の地下水もなくなってしまうと思う。
C4:あ〜。今はせっかくおいしい水が飲めているのにダムを造ることになってしまうかもね。

合は、各授業実践において、第2段階の「社会への関わり方を考える問題解決的な学習」に進むと、飛躍的に増加した。さらに、単元の終末になると、その割合は実践Ⅰでは80%、実践Ⅱでは86%まで達した(表10)。McNemar検定の結果からも、第1時から単元の終末に掛けて、「地域社会に関わろうとする態度」が表れた振り返りの記述が見られた人数は有意に増加したことが認められた(表11)。

以上のことから、学習過程(図2)を基に開発した単元を実践したことによって、社会的事象を「自分事」として捉える児童の意識は深まり、「地域社会に関わろうとする態度」を育むことにつながったといえる。

表9 単元の終末の児童の振り返り

<b>実践Ⅰ</b>
・リサイクルなど他人事だと思っていたけれど、最終処分場が後7年ですべてなくなってしまうと知って、 <u>生ごみの水を切ったり段ボールコンポストを使ったりして、ごみを減らすことをがんばって最終処分場を長生きさせたいです。</u>
・B市のようにマイバッグを使ったり、生ごみがよく燃えて、少しでも減るように、生ごみぎゅっと一絞りや3Rを守ったりして、 <u>最終処分場が10年後、20年後…まだまだ長生きできるように、自分の家でも市役所がやっている取組に協力し、リサイクルもたくさんしていきたい。</u>
<b>実践Ⅱ</b>
・水を使うことは当たり前だと思っていたけれど、水を多く使い過ぎると、 <u>未来ではなくなるかもしれないと思うようになりました。水を使う量を制限したり、大切に使用したり、地下水が残るようにしたいです。</u>
・今降った雨は、私たちが20歳から30歳になってから飲むんだなと思いました。わたしたちのコンビニ(両親の職場)にも、ポスターを描いて貼りたいと思います。私は <u>地下水を無駄にしないようにどうしたらいいか考えたいです。</u>

表10 「地域社会に関わろうとする態度」が表れた振り返りの記述が見られた人数と割合

段階	学習過程	実践Ⅰ			実践Ⅱ		
		時	人数	割合(%)	時	人数	割合(%)
第1段階	つかむ	1・2	13	23	1・2	5	9
	調べる	3・4 5・6	12	22	3・4 5	5	9
	学び合う・まとめる	7	3	6	6	8	15
第2段階	課題を把握する 見通しをもつ (学習活動①)	8	29	54	7	22	40
	課題を追究する (学習活動②)	9 10	31	56	8・9 10・11	15	27
	選択・判断する (学習活動③)	11 12	21	39	12	48	86
	社会生活へ生かそうとする(学習活動④)	13	44	80	13		

表11 「地域社会に関わろうとする態度」が表れた振り返りの記述が見られた人数の変容

	実践Ⅰ n=55			実践Ⅱ n=56		
	+	-	±0	p		
実践Ⅰ	31	0	24	**		
実践Ⅱ	43	0	13	**		
直接確率計算、両側検定 ** p<.01						

+は「地域社会に関わろうとする態度」が表れた振り返りの記述へと変容した児童  
-は「地域社会に関わろうとする態度」が表れた振り返りの記述が見られなくなった児童  
±は「地域社会に関わろうとする態度」に関する変容が見られなかった児童

(イ) 「地域社会に関わろうとする態度」の行動化

各実践後から約1か月半、ごみの減量や節水などに、実際に意識して行動したことを自由記述形式の調査により把握した(表12)。実践Ⅰでは分別の徹底やリサイクル活動への協力に、多くの児童が取り組んでいた。また、段ボールコンポストを購入したり、マイバッグを使い始めたりするなど、家族の協力を得て、取り組んだ児童もいると分かった。さらに、実践Ⅱでは個人や家庭の状況に合わせ、自分ができる節水の工夫に、多くの児童が取り組んでいた。

したがって、社会的事象を「自分事」として捉えた学びの過程によって形成された「地域社会に関わろうとする態度」は、自分にできることを考え、社会への関わり方を選択・判断した児童の行動に結び付くことが明らかとなった。

さらに、表13は、ごみの減量や節水などを意識して行動した人数と、その行動を

表12 質問紙調査の自由記述

<b>実践Ⅰ</b>
・分別の徹底を心掛けて、ごみを捨てた(20人)
・牛乳パックを開いて、リサイクルした(5人)
・紙のリサイクル用のためのごみ箱を作った(2人)
・生ごみを絞り水気を取ってから捨てた(3人)
・買い物でマイバッグを使うようになった(2人)
・段ボールコンポストで生ごみ処理を行った(2人)
・残飯が出ないように、完食を意識した(2人)
・牛乳パックをスーパーの回収ボックスに出すようになった(1人)
・ティッシュではなく雑巾を使って拭いた(1人)
<b>実践Ⅱ</b>
・蛇口をこまめに閉じ、使う量を減らした(32人)
・水を出し過ぎないように水量を調節した(17人)
・使う分の水を汲んだり溜めたりして使った(9人)
・湯船に溜まっている水を再利用した(4人)

続けている人数をまとめたものである。実践前から、ごみの減量や節水に取り組む児童はいたが、各実践後、過半数を超える児童が意識して行動し、続けていたことが分かった。

以上のことから、学習内容に応じて、本研究における学習過程（図2）の授業を繰り返し展開することは、「地域社会に関わろうとする態度」を育むことに効果的だといえる。

**表 13 行動した人数と割合**

実践Ⅰ N=55 実践Ⅱ N=56

調査項目	実践Ⅰ		実践Ⅱ	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
行動した	38	68	46	82
行動を続けている	33	59	45	80

## 5 研究のまとめ

### (1) 研究の成果

本研究において、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりとして、社会的事象を「自分事」として捉え、「地域社会に関わろうとする態度」を育む単元を開発し、授業実践をしたことにより以下の成果が得られた。

ア 地域社会に貢献できるという児童の思いが高まるとともに、社会科の学習を好意的に捉えるようになった。

イ 実社会で働く人や友達との対話的な学びや、地域社会に見られる切実な課題を把握し、解決への見通しをもった主体的な学びを実現したことにより、自分たちの生活を含めた地域の人々の生活を関連付けて考え、社会への関わり方を選択・判断する深い学びの実現につながった。

ウ 社会的事象を「自分事」として捉える児童の意識が深まり、「地域社会に関わろうとする態度」は効果的に育まれ、行動までつながることが確認できた。

以上の成果から、社会的事象を「自分事」として捉え、「地域社会に関わろうとする態度」を育む学習過程は効果的に働いたといえる。

### (2) 今後の研究課題

本研究により、以下のような課題が得られた。

ア 他の分野・単元においても、社会的事象を「自分事」として捉え、「地域社会に関わろうとする態度」を育む単元の開発を継続し、授業改善に取り組む。

イ 「地域社会に関わろうとする態度」を効果的に育むために、教科横断的な視点で、学習内容を配列し、関連を図っていく。

## 注

- 1) 文部科学省『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』2016 132 ページ
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』2017 23 ページ
- 3) 宮本光雄「地域社会における社会認識教育」社会認識教育学会編 『社会科教育のニュー・パースペクティブ - 変革と提案 - 』明治図書 2003 308 ページ
- 4) 前掲2) 51 ページ
- 5) 澤井陽介『社会科のデザイン』東洋館出版社 2015 73 ページ
- 6) 北俊夫『なぜ社会を学ばせるのか』文溪堂 2012 45 ページ
- 7) 前掲2) 135 ページ
- 8) 澤井陽介『子供の思考をアクティブにする社会科の授業展開』東洋館出版社 2016 p10